

# 平成30年度事業報告

## <はじめに>

創立 84 周年を迎えた公益財団法人日本野鳥の会(以下「当会」という。)は、SDGs(持続可能な開発目標)が注目される中、全国の連携団体(支部等)(以下「支部」という。)と協働しながら、生物多様性の保全活動や政策提言、当会独自の野鳥保護区の設定・維持管理等の保護事業、及び野鳥や自然に親しむ人々を増やすための普及事業を推進するため、多岐にわたる活動を展開し、当初の事業計画に掲げた目標を概ね達成することができた。

絶滅危惧種の保護については、根室、釧路、日高地方のシマフクロウ生息地を新たに購入し、当会独自の野鳥保護区は 42 か所、合計 3994.5ha となった。オオジシギについては北海道内全域で調査を行い、推定生息数は約 35,000 羽であることを明らかにした。国際的な連携のもとに、シマアオジ、チュウヒについての情報収集と発信、提言及び活動支援、並びに里山の保全とサンバの保護のための事業を展開した。

また、自然エネルギー発電施設が鳥類に及ぼす恐れのある計画に対して、複数の支部と共同で意見書等を提出するなど対応策をとるとともに、鳥類の陸上・洋上風力施設への感受性指標及びセンシティブティマップの作成に着手した。

普及活動においては、新規入会の促進や新たな関心層の拡大につなげるため、非会員を対象とした『初心者向けバードウォッチング』を全国の支部で開催し、前年より 500 人以上多くの参加者があった。

また、支部の普及活動の活性化のため、全国の支部の探鳥会リーダーが交流し、連携を深める機会として『探鳥会リーダーズフォーラム』を開催した。

当会の活動をご支援くださる会員やサポーター(寄付者・販売物購入者)の動向については、会員数 34,456 人(2019(H31)年 3 月 31 日時点)となり、前年度比 368 人減少となった。

会員の減少と高齢化の問題は特に支部において顕在化している。今期、二本松支部から支部解散の申請があり、それに応じて連携団体の認定を取り消した。その他にも、継続的な支部活動の実施が困難で、その存続が危ぶまれる支部がいくつかあり支援に乗り出しているが、支部活動の弱体化は当会の根幹を揺るがすと認識し、全支部の現況調査を急いでいる。

財務面では、経常収益は 10 億 9 千 9 百万円、そのうち寄付及び遺贈は 1 億 6 千 5 百万円、事業収益は 7 億円であった。一方、経常費用は 11 億 3 千 3 百万円であった。

当会の収入は大口寄付への依存度が高く、安定的とはいえない。活動成果を社会に向けてきちんと発信し、活動実績が将来の人的、金銭的支援につながる好循環を安定的につくるために、新年度から広報室の発足が決定された。

## <各事業の概要>

### I 自然保護事業

当会の活動の中心をなす自然保護事業では、絶滅のおそれのある希少な野鳥種の保護を図るとともに、政策提言や具体的な保全活動等の事業を展開した。

## 1 絶滅のおそれのある種の保護

絶滅のおそれのある種の保護については、緊急に保護を必要とする種として、

- ・ タンチョウ(湿原)
- ・ シマフクロウ(森林)
- ・ カンムリウミスズメ(海洋)
- ・ オオジシギ(原野)

をそれぞれ取り上げ、各種の保護事業を展開した。

また、チュウヒやクロツラヘラサギの情報収集や、マナヅル、ナベヅルの越冬地分散事業、アカコッコの保護活動を継続した。

### (1) タンチョウの保護

#### 1) 新規生息地の保全

胆振(特に、むかわ町、ウトナイ湖周辺、長沼町)及び日高地方での生息状況を、調査及び聞き取りにより把握した。また、道央圏におけるむかわ生まれの標識個体の確認情報を収集し、地域の関係者と情報交換を行った。

『むかわタンチョウ見守り隊』の会合への出席、研修会講師、代表者との随時意見交換や相談対応のほか、『広報むかわ』に毎月原稿を寄稿して情報提供を行い、地域の活動を支援した。

#### 2) 繁殖環境の保全

当会独自の野鳥保護区(以下「野鳥保護区」という。)への侵入者対応等のため、170回以上巡回を実施した。早瀬野鳥保護区温根内では幼鳥 1羽を確認した。また、えりも町における風力発電計画に対し関係者と連携して事業者意見書を提出した。

#### 3) 越冬環境の保全

- ① 地元の子どもたちや企業、大学生の協力を得て冬期自然採食地の維持管理作業を3回実施した。また、無人撮影や直接観察を行って利用状況を把握した。
- ② 11月から3月にかけて、環境省委託の給餌場として同省の行う給餌量削減4年目に協力し、飛来数に応じ約4tの餌を給餌した。
- ③ 『鶴居村タンチョウと共生するむらづくり推進会議』の委員及び運営部会委員として本会議に3回、運営部会に2回、小委員会(『保護のあり方』『農業との共生』『地域振興』)に5回参加し意見を述べた。

#### 4) 普及活動

『くしろエコフェア 2018』への出展、タンチョウイラスト展やコンサートの開催を通じ、当会のタンチョウ保護の取り組みやタンチョウの魅力、生態について解説した。来館者数は過去最高の5,265人となった。

また、村内の小学校での授業、近隣の高校の『自然ガイド』実習では高校生にタンチョウガイドを実施してもらい、給餌場を訪れる観光客にも解説する場を提供した。

### (2) シマフクロウの保護

#### 1) 生息地の保全

- ① 根室、釧路、日高地方のシマフクロウ生息地123.4ヘクタールを購入し、野鳥保護区の新設、拡張を行った。日高方面・根釧方面の土地情報収集及び地権者との売買交渉を進めた。また、根室・釧路・日高管内のシマフクロウ生息地において保全目標を策定し、土地情報を収集してGISデータベースを作成した。

- ② 釧路管内で音声調査を実施、音声データの解析を進めた。杉本野鳥保護区シマフクロウ釧路第2ではカラマツの植林地 17.5 ヘクタールの間伐を実施し、野鳥保護区内で繁殖状況調査を継続して実施した。また、侵入者の対応等のため、巡回を 137 回実施した。

#### 2) 採餌環境の整備

- ① 持田野鳥保護区シマフクロウ日高第1内の給餌場へヤマメを 180kg 搬入した。
- ② 野鳥保護区内の複数河川で餌資源量を把握するために魚類調査を実施した。

#### 3) 営巣環境の調査等

音声調査の結果や有識者へのヒアリングをもとに、根室管内で新規に巣箱を設置する候補地を 1 か所選定した。また、釧路管内の山林において巣箱を設置可能な巨木調査を実施した。

#### 4) 普及活動

春国岱原生野鳥公園で開催したイベントにてシマフクロウの絵はがきを景品として配布し普及に努めた。また、根室カトリック幼稚園の『天使の森プロジェクト』を実施した。

巣箱の利用状況やレンジャーによる自然解説の動画等をブログ、Facebook で広報したほか、ランチコンサートやその他のシンポジウム等で講演やポスター発表を実施した。また、普及室と連携し千人の森Tシャツを制作・販売して普及に努めた。

### (3) カンムリウミスズメの保護

三宅島グループを中心に、調査活動や普及活動を展開した。

#### 1) 調査・保護活動

- ① 大野原島、地内島で洋上個体数調査、上陸調査を実施した。また、神子元島にてセンサーカメラによる捕食者調査を実施した。
- ② 前年度に設置した人工巣の設置位置や形状の記録をもとに改良した人工巣を神子元島に 26 個、烏帽子島に 5 個、温度ロガーやセンサーカメラと共に設置した。
- ③ 鳥獣保護区の指定について情報収集を行った。
- ④ 祇苗島、神子元島にてそれぞれ 1 個のジオロケーターを回収、解析した。結果は日本鳥学会にて発表した。

#### 2) 普及活動

- ① 下田市教育委員会主催の講座で講演を行った。また、神津島の島民からの依頼を受けて講座、観察会の実施のための調整を進めた。
- ② 4 月に三宅中学校 1 年生を対象に学校での講義と漁船をチャーターしてカンムリウミスズメ観察会を実施した。また、次年度の実施に向けた調整を行った。
- ③ 調査、その他の活動について SNS などで配信した。
- ④ 適切なゴミ処理方法の普及のため、地元関係者と情報交換を行った。

### (4) オオジシギの保護

オオジシギ保護調査プロジェクトチームを中心に、調査活動や普及活動を展開した。

#### 1) 調査・保護活動

- ① 4 月末から 5 月にかけて、169 名(内、支部会員は 121 名)の協力を得て道内 588 メッシュで調査を実施した結果、道内推定生息数は約 35,000 羽であった。
- ② 51 支部から回答取得、22 県 56 か所の繁殖地の半数以上で消失か、個体数減少の傾向があることが明らかとなり、野鳥誌に報告を掲載したほか、ファクトシートとして取りまとめた。

- ③ 関係者との協議を行い、反映に向けて必要な手順を確認した。
- ④ 苫小牧市(市長及び担当部署)、胆振振興局、環境省などと意見交換を行った。
- ⑤ カラーフラッグ付き個体の情報収集を継続し、2018年7月に茨城県水戸市で観察されたとの情報が得られた。

## 2) 普及活動

- ① 北海道内30市町村1,067校の小学4年生などに小冊子を約41,000部配布した。また、小冊子に使用したイラストを元に、展示パネルを制作し、協賛企業が開催する大規模イベントでパネルを展示したほか、小冊子約200部を来場者に配付した。
- ② ファクトシート4種、オオジシギノート1種、及び動画を作成し、ウェブ上で公開した。
- ③ Facebook等を24回更新した。また、オオジシギLINEスタンプの配付を継続した。

## (5) その他の種への取り組み

### 1) マナヅル、ナベヅルの越冬地分散

鹿児島県出水市での越冬の集中化により、越冬地分散が急務な課題となっている。このため、国内のかつての越冬地の復元・保全及び生息環境である里地(水田等)の生物多様性保全のため、以下を実施した。

- ・ 環境整備や観察マナー等、越冬地保全のガイドラインを製作するため、ツルの食性分析、餌資源量、越冬阻害要因調査を愛媛県西予市で実施した。
- ・ 越冬地の復元事業を実施している愛媛県西予市で、田園ロマンの里づくり推進委員会(ツル・コウノトリ活動方針の検討の場)及びツル・コウノトリ見守り隊のアドバイザーを務めた。
- ・ 愛媛県西予市で、過去のツルの生息状況や地域との関わりを調査・普及するため、関係者向け勉強会『ツルから探る江戸時代の西予』(参加者23名)、講演会『ツルから探る西予の魅力』(参加者約90名)を開催した。
- ・ 愛媛県西予市、佐賀県伊万里市、熊本県玉名市のツル渡来地にある小学校でツルや水田の生きものに関する学習会を合計5回実施した。
- ・ 愛媛県西予市のツル・コウノトリ保全計画(仮称)の準備会の準備を進めた。
- ・ 越冬地の保全を呼びかけるチラシ・ポスターを制作し、西日本の渡来地で行政と連携し、狩猟者や農業者、市民に約30,000部配布した。
- ・ ツルの越冬地約10か所に、農業の多面的支払機能交付金の新たな活動メニューとして、ツルやコウノトリに関する水田整備や生き物調査等の導入を呼びかけた。
- ・ 上記のうち、徳島県内の2か所において、農家と具体的なメニューの打合せ会や説明会の準備を進めた。
- ・ 2018(H30)年度全国ツル飛来状況調査を実施するとともに、過去13年間の調査結果を整理し、越冬候補地リストを作成した(環境省請負)。

### 2) アカコッコの保護

三宅島グループを中心に、調査活動や普及活動を展開した。

#### ① 調査・保護活動

- ・ GPSロガーの回収と装着を実施し、ロガーを3個回収、新たに5個体にロガーを装着した。
- ・ センサーカメラを設置し、捕食者の出現状況調査を実施したほか、地元団体と情報交換を行った。

#### ② 普及活動

- ・ 島民向けにアカコッコの生態と環境管理手法、当会事業を解説する講習会を行っ

た。

- ・ 島外からの参加者を迎えてワークキャンプ形式の環境管理を継続した。

### 3) その他の絶滅のおそれのある種への取り組み

シマアオジ、チュウビ等の希少種について、保護上、必要な調査を引き続き行い、国際連携での情報収集と発信、提言及び活動支援等を行った。

#### ① チュウビの調査・保護活動

- ・ サロベツ原野周辺の生息状況を把握した。
- ・ オホーツク海沿岸、根室から霧多布、石狩低地帯及び石狩川流域における生息状況の確認調査を実施した。
- ・ チュウビが風力発電の影響を受ける状況を把握した(PNファンド助成事業)。
- ・ 宗谷振興局内においてチュウビが開発行為の影響を受けている件について、地元行政機関等に提言を行った。

#### ② シマアオジの調査・保護活動

- ・ 昨年度複数の繁殖個体が確認されたサロベツ原野において、サハリンとの個体群と比較するためにシマアオジを6羽捕獲してDNAサンプルを採取した。また、渡りの中継地の把握と翌年度の帰還状況を把握するために個体識別のためにカラーリングを装着した。
- ・ 前年同様にサハリン北部のオハ湾周辺でロシアの研究者と協力して捕獲調査を行った。
- ・ サロベツにおける繁殖状況を確認するため、地元のNPOサロベツエコ・ネットワークの協力を得て調査を行った。繁殖つがい数は昨年度の31つがいから25つがいに減少していることを確認した。

#### ③ サシバの保護事業

里山の保全とサシバの種としての保護のための事業を施設運営支援室との共同で開始した。

- ・ フィリピン北部での密猟撲滅の取り組みとして、3月に地元支援のためのエコツアーの企画を行い、16人の参加者で実施した。
- ・ サシバの保全のために繁殖地、中継地、越冬地でサシバに関わっている関係者のネットワークを作るため『サシバサミット 2019 市貝大会』の準備に実行委員として参加し準備を進めた。
- ・ 豊田市自然観察の森で行っている『サシバの住める森づくり』の取り組みを進めた。
- ・ 中華鳥会の招聘を得て、台湾における春のサシバの渡りを祝うフェスティバルに参加し、台湾、フィリピンなどのサシバの保護関係者と情報交換を行った。

#### ④ ヘラシギの保護活動

- ・ 香港バードウォッチング協会とともに、ヘラシギと湿地保全のための教材“Spoon-billed sandpiper Teaching Kit”を作成した。また、日本語訳を作成し希望者にPDFで配布した。

#### ⑤ クロツラヘラサギの保護活動

- ・ 1月に、香港バードウォッチング協会主催のクロツラヘラサギ世界一斉センサスにおいて、日本クロツラヘラサギネットワークに協力して調査を行った。今年は、前年よりも30羽多い538羽が確認された。結果は当会のホームページ等で広報した。

## 2 法制度等による種や生息環境の保全

重要野鳥生息地 (IBA, Important Bird and Biodiversity Area) 保全対策の推進や、風力発電対策、密猟対策等の活動を行った。

#### (1) IBA 保全対策の推進

国内の重要な野鳥生息地保全のため、IUCN 版レッドデータブック種や固有種の生息地、大規模な生息地等、保全上重要度が高く、国際基準も満たす IBA における環境への脅威や保全活動の現状を把握し、国内外からアクセスできるようにデータベースを整えた。IBA の保全レベル向上にむけて、把握された脅威への対策の検討を行った。

特に、海鳥を指標として保全上重要度の高い海域として、当会が 2012(H24)年度に選定した日本の重要海域(マリンIBA)については、法的保護指定状況や、地元の保全活動団体、漁業者の取り組み、環境への脅威や問題点等の情報を収集・整理し、海洋保全のための基礎資料となるように取り組んだ。

また、鳥類以外の分類群も統合して生物多様性を保全するための重要地域 (KBA, Key Biodiversity Area) の国内選定に向けた準備を行った。

##### 1) 具体的取り組み

- ① IBA の選定基準を満たしているサイトを新たに登録するため、情報収集を行い、栗島を新規サイトとして登録の準備を行った。
- ② 2015 (H27) 年度に実施した IBA のモニタリング結果を含め、最新情報をホームページやWBDB(World Bird Database)に反映させた。また、選定理由及び選定基準種の変更やエリアの変更について必要なサイトへの対応を行った。
- ③ 個々の IBA における保全上の危機に対する対応と地域の保護活動の支援を行った。
- ④ 環境省のアセスメント支援ネットワークの EADAS (環境アセスメントデータベース) をとおして、風力発電の立地選定への活用を図った。
- ⑤ 日本の陸域の IBA のホームページをリニューアルした。
- ⑥ 国内の漁獲量や漁具の種類資料統計をもとに、刺し網による混獲の可能性が高い海域の抽出を行った。また、コロニー周辺の海鳥の採餌利用海域のデータをもとに、混獲のリスクの高いエリアの抽出を、研究機関と共同して進めた。
- ⑦ KBA の情報を BirdLife International のネットワーク等を通じて収集し、関連団体との共有を図った。

#### (2) 自然エネルギー対策の取り組み

- ・ 自然エネルギー発電施設が鳥類に及ぼす影響に関して、鳥類の陸上・洋上風力施設への感受性指標及びセンシティブティマップの作成を試みた。
- ・ 累積的影響評価のあり方について海外事例を収集し、環境省等へ報告を行った。
- ・ 利害関係者間のコミュニケーション促進、関連委員会への出席、政策提言を通し、自然エネルギーの適正な導入に向けた検討を行った。
- ・ 大規模太陽光発電施設に関しても、アセス法の対象事業とすることを目的として提言を行った。その結果、太陽光発電施設等に係る環境影響評価等の基本的考え方に関する検討会が環境省で行われ、環境影響評価対象事業とする方針が示された。
- ・ 風力発電がチュウヒに影響を与える状況を明らかにした (PN ファンド助成事業)。
- ・ 日露経済協力で行われる北方四島での風力発電事業に関して、鳥類保護の観点から建設場所の選定と環境影響評価を適正に行うように政府に要望書を提出した。

- ・ 各地域で発生している自然エネルギー発電施設の建設問題に対する支部の対応を応援した。
- ・ 野鳥と風力発電のセンシティブティマップの作成をテーマに、海外や国内の事例をまとめた資料集(32、33集)を発行した。これらの資料はPDF版とし、ホームページで無料で提供をした。
- ・ 今後、日本でも拡大すると思われる、ドイツのシュタットベルケ(自治体と民間が組んで、再生可能エネルギー事業を行うと共に、公共サービスを行う仕組み)や熱供給の仕組みの視察を行い『野鳥』誌で報告を行った。

### (3) 野鳥密猟対策の取り組み

密猟や違法飼育を根絶し、違法販売をなくすため、全国野鳥密猟対策連絡会と協力して活動を行った。また、環境省による次期鳥獣保護管理事業の基本指針改定のための『愛玩使用目的の捕獲について』の集団ヒアリングに参加し意見を述べた。

### (4) 身近な野鳥の調査・保護事業

- ・ インターネットを使つての市民参加としてツバメの全国での繁殖状況の調査を継続している。また、参加者の増加や利便性、サービス向上を目指して、ソフトウェアのアプリ化に着手した。
- ・ 神奈川県大和市において、市民調査として当会のツバメ子育て状況調査のサイトを用いたツバメの生息状況調査を2014(H26)年より実施している。この市民調査の最初に行う調査講習会の中で、当会のサイトの使い方やツバメの生態に関しての講師を務めた。

## 3 その他の自然保護活動

野鳥情報の収集や鳥インフルエンザ対策、研究論文集の発行、鳥類の放射能汚染対策、ラムサール条約関連対応、ロビー活動等、自然保護活動を行った。

### (1) 野鳥生息情報の収集と発信

自然保護活動の基礎的な情報として、以下のように野鳥の生息情報の収集を行うとともに成果を積極的に発信した。

- 1) 研究者との協力により、全国の支部の支部報の定期探鳥会のデータをデータベース化し、鳥類の生息状況の変化を明らかにするため、支部報のデジタル化を行っている。
- 2) 野鳥情報収集のため、一般参加による『見つけて渡り鳥』サイトを運営しており、参加者増を目指してアプリ化に着手した。
- 3) 陸生鳥類(森林・草原)のモニタリングサイト1000で第3期(2013(H25)~2017(H29)年)の結果取りまとめの報告書案を作成した。報告書は2019(R1)年度に発行予定。  
また、第4期(2018(H30)~2022(R4)年度)の調査に着手した。また、第4期の調査開始に伴い、調査員の調査方法の徹底と、後継者育成のための研修会を鹿児島、京都、東京で企画実施した。現役大学生やNGO、NPO団体職員など若手と支部の調査員をつなぎ、後継者の育成を目指している。
- 4) 鳥類関係の他団体及び生物多様性センターとの共同事業として、全国繁殖分布調査を2016(H28)年~2020(R2)年で行っており、3年目の繁殖期調査を行い、のべ1,656コースの調査が終了した。また、各支部が行っている探鳥会の記録をアンケート

調査結果として反映させた。

(2) 鳥インフルエンザ感染や油汚染事故等への緊急対応

- ・ 環境省の水鳥救護センターの協議会において、1月に発生したタンカー『SANCHI』の油流出事故の影響について意見交換を行った。
- ・ 隣接する韓国や中国での発生が顕著なことから高病原性鳥インフルエンザの情報収集を行った。
- ・ ウトナイ湖にて水鳥や猛禽類などに衰弱や死亡個体等の異状がないか計24回の巡回監視等を行い、状況を把握した。巡回監視後は、必要に応じて関係施設や機関と情報共有を図った。風蓮湖では鳥インフルエンザの感染発生がなかったため巡回監視は未実施だった。

(3) 野外鳥類論文集 Strix 34号の発行

会員、支部、ブロック、職員の調査研究や観察記録等の成果を取りまとめた Strix34号を7月に発行した。300部を制作し、約230部を頒布した。また、調査研究のできる人材育成を目的とした野外鳥類学講座を2月に15名の参加者で実施した。

(4) 原発事故による鳥類への放射性物質の影響モニタリング

福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質の鳥類への影響に関して、高線量の汚染地域と非汚染地域において、カラ類の繁殖状況、巣材への放射性物質の蓄積状況を継続して調査し、『野鳥』誌等で広報を行った。

(5) ラムサール条約関連ネットワークへの参加と保全活動の推進

- ・ ウトナイでは北海道ラムサールネットワーク(以下、HRN)の構成メンバーとして、HRNのMLで情報提供を行った。春国岱原生野鳥公園で8月に開催されたHRN総会において事務局運営、開催をサポートした。また、ラムサール条約湿地市町村会議のホームページに情報及び写真の提供で協力したほか、団体対応時にラムサール条約やフライウェイパートナーシップの紹介を行い、成果の広報を行った。また、世界湿地の日サイトでの情報提供を行った。
- ・ ウトナイ湖、風蓮湖、ヤウシュベツ川、風蓮川などにおいて北海道マガン・ヒシクイ合同調査やモニタリング1000(ガンカモ類)に参加、協力した。
- ・ 日本野鳥の会東京の東京湾三枚洲のラムサール条約湿地登録の支援を行った。結果、ドバイで開かれたCOP13で認証を得た。
- ・ 12月に開催された東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ(EAAFP)のMOP10に参加し、情報の収集を行うとともに、自然エネルギー施設の水鳥に対する影響に関するタスクフォース立ち上げの提案を行った。
- ・ フライウェイパートナーシップの普及活動の協力として、EAAFPのCEPAワークショップに出席し、当会のCEPA事業の事例発表、教材紹介及び情報交換を行った。

(6) 地域の希少鳥類生息地における開発問題への対応

厚岸郡厚岸町内高規格道路建設計画に対して北海道開発局、環境省及び保護関係者との道路に関する協議を5回実施した。また、釧路支部・根室支部が実施した猛禽類調査とその取りまとめ、道路建設時に配慮を求める要望書の関係機関への提出に

協力した。

(7) バードライフとの連携

バードライフ・インターナショナルとは、IBA 事業やシマアオジの保護のための国際連携や IUCN のレッドリストの評価への協力、海外での風力発電対策の情報提供を受けるなど様々な協力関係にあり、今年度 9 月に開かれた世界大会に参加した。会議では KBA と IBA の関係やパートナーの若手職員の人材育成などの議論を行うとともにアジア地域で各パートナーがより連携をして活動するための議論を行った。

(8) 二カ国間渡り鳥保護条約等への協力

12 月に沖縄で開催された、日中、日豪、日韓、日米の渡り鳥保護に関する条約等に関する会議に、鳥類専門家として参加し、マナヅル・ナベヅル、カンムリウミスズメ、トモエガモの日本の状況について報告をするとともに情報交換を行った。また、この会議に先立って行われた東アジアにおける陸生鳥類のモニタリングに関するワークショップに参加し、シマアオジ等の渡り生の陸生鳥類のモニタリングについて意見交換を行った。

## II 普及事業

### 1 野鳥に関する科学的な知識や保護思想を普及する活動

全国の支部が行う探鳥会の運営支援や教材の作成・配布、各種イベントの実施等を通じて、野鳥に関する科学的な知識及びその適正な保護思想を普及した。

(1) 支部の探鳥会の運営支援

- 1) 探鳥会保険の加入・手続き代行等の支援を行った。76,364 名(昨年度 74,724 名)が全国の支部主催の探鳥会に参加した。
- 2) 新規入会の促進や新たな関心層の拡大につなげるため、非会員を対象とした探鳥会『初心者向けバードウォッチング』を、11 月～3 月に 31 支部と 85 回(昨年度 24 支部 46 回)開催し、参加者は 2,411 名だった(昨年度 1,902 名)。
- 3) 全国の支部等の探鳥会リーダーを対象に、毎月 1 回メールで通信を発行し、探鳥会運営に関する財団とリーダー・支部との情報交流を行った。3 月末現在、844 名の探鳥会リーダーが登録している。
- 4) 全国の支部の探鳥会リーダーを対象に 2 月 16 日・17 日に宮城県仙台市で『探鳥会リーダーズフォーラム』を開催し、15 支部 34 名が参加した。現場で活躍するリーダー同士を有機的につなげ、情報交換できる関係を構築し、支部の普及活動の活性化につなげていく。
- 5) 探鳥会リーダー向け研修会の開催を促進するため、企画・運営のサポートや講師派遣などの支援を行っている。10 月に近畿ブロックの探鳥会リーダーを対象に、財団事務局主催のリーダー研修会を実施し、参加者は 5 支部 30 名だった。

(2) ツバメの普及事業

一般になじみのあるツバメを題材に、人の暮らしに隣接した野鳥を観察、調べ、生息環境の保全まで総合的に取り組む事業を展開している。

- 1) 自然保護事業と連携して『ツバメの子育て調査』を実施した。

## 2) ツバメのねぐらの普及

子育てを終えたツバメが、近隣の河川敷などで集団ねぐらを形成していること、ツバメを守るためには、ねぐらをつくるヨシ原を保全する必要があることを普及するため、『全国ツバメのねぐらマップ』を、支部のツバメのねぐら入り観察会で 1,860 部、一般からの申込みで 1,012 部、計 2,872 部を配布した。また、ツバメのねぐら入り観察会を、多摩川で 2 回実施した。

## (3) 野鳥や自然への関心を高めるための教材制作及び普及活動

- 1) 野鳥観察や自然全般への関心を高めるため、小冊子制作と普及を行い、スズメに関する小冊子『こんにちはスズメ』を 20,000 部発行し、9,211 部配布した。また、来年度 4 月の発行に向けて新小冊子『なぜカルガモは引っ越しするの？～鳥のふしぎ相談室』の制作を進めた。
- 2) 小冊子の申込者に向けて、当会の活動やイベント情報、支部主催のイベント等の情報を紹介するため、パンフレット『探鳥会のご案内』を 4 回のべ 202,000 枚発行。また、一斉メール送信を、全国向けには 4 回のべ約 243,000 通実施した。
- 3) 小冊子申込者を対象とし、『はじめてのバードウォッチング講座』(計 3 回、総参加者 43 名)、『ニコンモナーク探鳥会』(計 5 回、総参加者 121 名)を開催した。

## (4) 野生動物との関わり方について考える機会の提供

- 1) 『野鳥の子育て応援(ヒナを拾わないで!)キャンペーン』ポスターを日本鳥類保護連盟、野生動物救護獣医師協会と合せて約 120,000 枚制作。学研ホールディングスを通じて学研教室(約 11,000 か所)、公立小・中学校(約 22,000 校)、公立図書館・小学校図書館(約 3,200 館)へ、また、警視庁や京都府警察署管内の警察署、交番(約 170 か所)、支部、当会を通じて約 50,000 枚のポスターを配布した。また、小冊子(1,927 部、電子書籍版含む)の配布、紙芝居(15 部)の寄贈等を通して、巣立ちヒナへの対応方法の普及を行った。
- 2) ヒナを救護する行政の対応の現状把握等を行い、一般の方や各種団体等からの問合せに対して情報提供を行った。

## (5) その他

バードウォッチングの普及と当会の活動を訴求するため、メーカー協賛の探鳥会を 5 回、室内講座とセットにした初心者向け探鳥会を 3 回開催した((3) - (3) 参照)。また、これまで当会と接点のなかった一般に働きかける企画として、一度に多人数に対応できる『スタンプラリー』を企画実施し、自然に親しみを持つ機会を提供した。『東京港野鳥公園フェスティバル』(5/20)では 1,134 名、『豊田市自然観察の森・自然ふれあいフェスタ』(5/20)では 142 名、『東京港野鳥公園・里地里山フェスティバル』(11/19)では 1,251 名が参加した。

## 2 野鳥保護の普及啓発のための広報・出版活動

野鳥保護や自然環境保全の普及啓発のために、印刷物の刊行や電子情報媒体の作成等の広報・出版活動を行った。

### (1) 『野鳥』誌の発行

年間 10 号を発行した。野鳥や自然保護に関する科学的知見の普及として、6 月号『ブッポウソウ復活のために』、8 月号『シマフクロウ保護の課題』、12 月号『オオワシ、オジロワシ』、2・3 月号『再生可能エネルギーの地産地消』、2019 年 4 月号『都市の湿地』を特集した。また、野鳥により関心をもってもらうために、5 月号『かわいい！ おもしろい！ この鳥観察』、7 月号『鳥の骨』、11 月号『鳥ビア～おもしろ鳥雑学～』などバードウォッチングシーズンにあわせた企画を特集した結果、大きな反響を得た。

文化面での企画として、会員の写真や俳句・短歌の投稿特集を年間 4 号設けたほか、いまの鳥学の知見を知ってもらうため、上田恵介副会長を聞き手に鳥類学者との対談企画『鳥学クロストーク』を不定期で連載しており、今年度は 4 回、連載開始からは 13 回を数えた。

## (2) 『トリーノ』の発行

夏号(47号)、秋号(48号)、冬号(49号)、春号(50号)を予定通り発行し、広く一般に配布した。連載の西川孟氏、入江泰吉氏、川田喜久治氏、藤原信也氏、星野道夫氏に加え、『憶の章』では春号に野町和嘉氏、夏・秋・冬号に植田正治氏の写真を掲載した。

野鳥保護問題を伝える企画として、夏号で『福島の声～3.11 から 7 年』、冬号で『環境をそのまま保全する——シマフクロウのための野鳥保護区』、春号で『自然保護の観点から平成時代を振り返る』について紹介した。

秋号には特別対談として『幸せな生き方とは』をテーマに、聖心会のシスターである鈴木秀子氏と柳生会長の対談を掲載し、反響を呼んだ。また冬号には恒例の新春対談として、理論物理学者として広く知られる佐治晴夫氏と柳生会長の対談を掲載した。発行部数は 1 号につき約 20 万部、配布拠点は春号で 1,686 か所であった。

## (3) ホームページの運営

ウェブではコーポレート、バードファンの 2 サイトの運営を行った。ホームページの 3 月末までのアクセス数は、コーポレートサイト 203 万回、バードファンサイト 996 万回だった。

コーポレートサイトでは、小冊子『こんにちはスズメ』や全国一斉探鳥会、ツバメのねぐら入り観察会、初心者向けバードウォッチングなどのイベント、意見書や要望書のプレスリリースなど、当会の活動について広報を行った。

バードファンでは、近年のウェブ検索の仕組みの変化に対応するため、野鳥写真のコンテンツ強化を図り、95 種、155 枚の野鳥写真を増強した。

また、野鳥の鳴き声を約 50 音声追加し、合計約 150 音声視聴できるようにした。

Twitter と Facebook を運営し、ソーシャルエリアネットワーク上での広報活動を行った。3 月末日現在、Twitter のフォロワー数 6,733 人、Facebook のフォロワー 11,574 人、『いいね』数は 10,996 人であった。

## (4) オリジナル書籍の刊行

主力商品である『新・山野の鳥 改訂版』『新・水辺の鳥 改訂版』『フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂新版』等の書籍を、一般の方が手に取りやすい書店等を中心に流通させ、野鳥や自然の魅力の普及に努めた。

### Ⅲ サンクチュアリ事業及び施設運営事業

直営サンクチュアリや受託施設の適切な管理運営を通じ、野鳥の魅力や地域の自然の大切さなどを伝えるとともに、サンクチュアリを拠点とした地域の自然環境保全活動を推進した。

#### 1 自然系受託施設の管理運営

都立東京港野鳥公園をはじめ、横浜市・豊田市・姫路市の3か所の自然観察の森、春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター(根室市)、ウトナイ湖野生鳥獣保護センター(苫小牧市)及び三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館(三宅村)の指定管理及び受託管理施設の適切な運営に引き続き注力した。

これら地方自治体が設置した自然系施設にレンジャーを配置し、当会のもつノウハウを提供することで、地域の生物多様性保全に貢献するとともに、担当施設の周辺地域の保全活動にも力を入れた。

豊田市自然観察の森では、6月に『サンバのすめる水田作り』をテーマに田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト地域交流会 in 愛知(豊田市)を開催した。

また、上記施設の運営支援活動に際し、当該自治体が許容する範囲において、当会の独自事業、自主事業の展開も促進した。その一つとしてレンジャー養成講座をウトナイ湖で10月に企画した。しかし、北海道胆振東部地震の発生によりやむなく中止とした。

豊田市自然観察の森では、自主事業として9月に日本湿地学会第10回大会を誘致し開催した。

#### 2 野鳥の魅力や地域の自然の大切さを伝える活動

サンクチュアリへの来訪者に、野鳥の魅力や地域の自然の大切さなどを伝えた。

##### (1) 普及啓発活動の実施

全国の受託施設及び直営のサンクチュアリにおいて、自然観察会、講座等のイベントや展示、マスコミ等を通じた広報等により、地域の自然、野鳥の魅力や大切さを伝えた。

##### 1) 三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館における普及啓発活動

- ① 館内展示物の新規作成と島内イベントへの出展、主催イベントを通じて、アカコッコ保護事業や外来種問題についての普及を行った。自主事業のカムリウミスズメ保護事業と共に三宅島大野原島での早朝個体数調査や日中での洋上調査を実施し、個体数の把握を行ったほか、次年度調査のための調整を進めた。三宅中学校1年生を対象に総合学習でカムリウミスズメ勉強会を開催したほか、受託業務での調査では三宅高校の生徒にも参加してもらうなど、子供たちへの普及に努めた。
- ② 島民向けにカムリウミスズメチャリティコンサートを開催したほか、週末ごとの観察会や平日のバードウォッチャー来島増に向けた平日のイベントなどを開催した。また、三宅島探鳥ツアーの案内チラシを作成し、販売出版グループ作成のバードショップカタログに70,000部同封した。
- ③ 三宅島自然ガイド『キュレル』のミーティングに出席し、活動への助言を行ったほか、アカコッコ館で実施している調査時には、記録方法や生き物の同定方法について指導した。また、自然ガイドの自主調査であるウミガメ産卵調査について、調査協力

や報告書作成の助言等を実施した。

- ④ 月に一回程度、未就学児とその保護者を対象とした観察会や室内プログラムを実施した。島内の老人会を対象にアカコッコを中心とする野鳥に関しての出張講座を開催した。

## 2) ウトナイ湖における普及活動

『ウトナイ湖・渡り鳥フェスティバル』『雁のいろいろアート展』などのイベントを計 10 回開催した。

## 3) 春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンターにおける普及活動

ネイチャーセンター周辺で 4 回、明治野鳥保護区牧の内で自然観察会を 1 回実施した。カトリック幼稚園との『天使の森計画』で 100 本の植樹と苗生産のためのどんぐり播種を行った。明治社員ボランティア及び自然観察会では 400 本を植樹した。また、ねむろバードランドフェスティバル実行委員会委員に就任して実行委員会に出席し、フェスティバル期間中は日本製紙及び明治と実施しているシマフクロウ・タンチョウ保護活動についてブース出展を行った。一般向けの講座、ボランティア体験イベント等を開催した。

## 3 サンクチュアリを拠点とした地域の自然環境の保全活動

直営サンクチュアリや受託施設を拠点として、地域の自然環境の保全活動を推進した。

### (1) 全国の受託施設における環境管理・モニタリング活動

全国の受託施設において、野鳥にとってより良い生息環境になるよう、環境管理や、モニタリング等の保全活動を行った。また、受託施設を中心に、周辺の自然環境も含めた地域の環境保全に向けて行政等へ働きかけた。

東京港野鳥公園では、開水面、干潟確保のためのヨシ・ガマ刈り、泥湿地耕耘等整備、外来植物の除去など環境管理作業を 189 回実施した。

また、鳥類センサス、シギチドリ類、鳥類相、カモ類生息状況、底生生物などの調査 13 項目 421 回の環境調査を実施した。

横浜自然観察の森では、環境管理を 269 回実施した。また保全管理計画書に基づく雑木林管理ゾーンの管理計画実施とモニタリングのための検討会、懇談会を、市民参加により合計 8 回開催した。

アライグマの捕獲事業にボランティアを募り 10 名の協力をえて 55 日間ワナを設置して、アライグマ 14 頭とタイワンリス 17 匹を捕獲した。

豊田市自然観察の森では、レンジャーが愛知県生態系ネットワーク委員として、施設運営支援室長がトヨタ新研究開発施設に係る環境監視委員会委員として、意見・提言等を行った。また、ラムサール条約湿地『東海丘陵湧水湿地群』に関しては、全面的にその保全活動に協力した。

三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館では、大路池の鳥類ラインセンサスを 24 回(月 2 回)、おもに越冬期に水鳥個体数調査を 36 回実施した。また、鳥類調査を伊豆岬で 12 回、釜方海岸で 12 回、雄山環状林道で 11 回、土佐林道で 11 回、坪田林道で 3 回実施した。三本岳周辺ではカムリウミスズメ調査を 1 回実施した。

海水魚の生息状況調査として長太郎池で 10 回、土方海岸で 6 回、サンゴの健康度を調べるモニタリング調査を富賀浜・カタン崎にて実施した。また、自然ガイドのフォローアップとしてウミガメ産卵上陸調査に協力した。適宜、環境保全の働きかけを行った

ほか、島の植生に影響を与える可能性のある事業について村への提言を行った。

## (2) 自然環境保全に関する調査と提言

### 1) 風蓮湖・春国岱

春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンターでは、繁殖期の鳥類相調査を春国岱第一砂丘で4回、第三砂丘で4回、鳥類を含む観察資源調査を12回実施した。春国岱を含む風蓮湖一円等でタンチョウやシギドリ類など各種鳥類調査を17回実施した。春国岱におけるエゾシカ対策に向けて関係者との情報交換を行った。

### 2) ウトナイ湖・勇払原野

ウトナイ湖サンクチュアリでは、周辺地域鳥類調査として湿原環境でのラインセンサスを5回、水鳥全域調査としてカウント調査を毎月1回計12回実施した。モニタリングサイト1000森林調査では苫小牧研究林でのスポットセンサスを8回実施した。さらに、外来種対策としてオオアワダチソウの抜き取りによる除去を5回実施し、216人で約39,800本を抜き取った。また、ギンドロの除伐を2回実施し、33人で300㎡内の萌芽及び実生木の除去を行った。

勇払原野では巡回を定期的にも実施したほか、希少種調査(シマクイナ2地点計4回、アカモズ1地点計6回)、安平川(下流部右岸)湿原ラインセンサス調査を2地点計8回で実施し、結果を公表した。また、勇払原野のラムサール条約湿地登録に向け、環境省、北海道、苫小牧市の各関連部局及び部署との情報交換を行った。7月に『勇払原野まるごとウォッチング』を参加者38名、11月に『勇払原野を学ぶ会』を参加者16名で開催したほか、地元団体からの依頼で講話を行った。これらを通じて勇払原野の重要性を市民に直接伝えたほか、ウェブで定期的に記事を掲載して広報に努めた。

苫小牧市内で計画されている統合型リゾート開発計画についての情報収集や地元関係者との協議を行った。

## (3) 直営施設(ウトナイ湖サンクチュアリ、鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ)の適切な運営・管理

### 1) 適切な運営・管理

ウトナイ湖サンクチュアリでは土曜、日曜及び祝日にネイチャーセンターを開館、一般市民や当会会員、バードウォッチャーへの情報提供などに対応し、平日の閉館日に団体利用の申し込みがあった場合は有料プログラムとして対応した。また、オオジシギ保護調査プロジェクトの一環として、公募した地元の親子と、オーストラリアからの研究者やジュニアレンジャーとの交流、合同調査を行ったことに加え、研究者と共に苫小牧市長や地元の小学校を訪問した。

また、ウトナイ湖サンクチュアリでは、『ウトナイ湖ファンクラブ』、鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリでは『タンチョウふぁんクラブ』を運営し、法人、個人を問わず活動を支援していただいた。

## IV 収益事業

上記Ⅰ～Ⅲの事業に資するため、収益を目的として以下の事業を行っている。

### 1 物品販売活動

新たに42品目のオリジナル商品を発売し、4月、7月、10月、12月にバードショップ

カタログを発行、12 回のイベントに出店し、商品の広報と販売を行った。また、新商品は、支部や卸先等に案内を行い、販売促進活動を行った。その結果、409,164 千円の売上を得た。

以上